

富士に祈る

57

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その11 —



石神井公園三宝寺池(東京都練馬区)

先回は、英蔵が「靈修業」を続けながら、「天茶供養」や「お詫び」といった修業の定式化、さらには「モラロジ」(道徳科学)を中心とする教義の形成を行ったことを記した。今回は、具体的な宗教活動を行うために英蔵自身が得度し、三宝寺池の供養に代表される「靈験」を示しながら、試験を乗り越えていく様子を記す。

昭和六年(一九三二)当時、新宗教は法的に様々な制約を受けており、風紀取締りの名目によって、弾圧される可能性もある時勢であった。修業の定式化や協議の形成といった事柄を成し遂げたのち、宗教活動として「靈修業」や「天茶供養」、「お詫び」といった行為を人々に施すためには、英蔵自身が何らかの資格を得る必要があった。この時、英蔵が頼ったのが鎌倉・補陀洛寺住職の黒沢光昭であった。黒沢は、まず自身が当時預かって

いた山梨県の泰祐院(真言宗醍醐派)で得度して、宗教活動をする資格を得た。その後醍醐寺で改めて得度してはどうかと英蔵に勧めたのである。

昭和六年三月七日に英蔵は泰祐院で得度し、「聖憲」と名を改めた(以後、本文中の呼称は「聖憲」と記す)。そして、四月十八日に改めて醍醐寺三宝院で得度し、「先達」に任ぜられたのである。ところで、「御五法」を中心とした「靈修業」を行っていくためには、さらに「行法加持」の資格を要した。聖憲は三宝院で行法加持の基本を修し、七月二十日にその資格を得て、「教師試験」に任ぜられた。

課題はまだ残っていた。当時、解脱会には数か所の集会所があり、それぞれでも「靈修業」を行っていたから、聖憲個人の資格だけでこれらを一括して把握することはできなかった。つまり、宿河原不動尊のように「醍醐

派の分教会」といった形態をとることで、それぞれが組織的に活動をしていくことができるようにしなければならなかったのだ。そのためには、まだまだ時間が必要であった。そこで聖憲は信者の一部が以前から信仰していた天津教の分教会となる方法を考慮していた。

天津教はもともと御嶽教の一派であり「御嶽教天都教会」として布教活動を行っていた。これも創始者である竹内巨磨と活動の中心人物である高島康明が新たな教団を作ることの困難であることを見極めてとった一つの方法であった。しかし、昭和五年(一九三〇)十二月に「明道会詐欺事件」に巻き込まれ、天津教そのものも菊花紋章に類似した紋章の使用や、独自の神話や神統譜を標榜したことを「不敬罪」としてとがめられ、御嶽教からの離脱を余儀なくされていた。聖憲は今しばらく様子を見ることにした。

教団としての組織を整えつつ、一方で聖憲が目指したのは、多聞寺の宝篋印塔参拝を含む北本宿の巡拝を解脱会の行事として位置づけることであった。聖憲の宗教活動における全ての始まりは、多聞寺の宝篋印塔から陀羅尼経を世に出したことに始まる。解脱会の開基ともいべき所縁の土地を巡拝し、祭祀することで、意義ある土地柄を信者に認識させることもできると考えたからだ。巡拝の日程を昭和六年五月八日と定めて、上野駅から高崎線・北本宿駅まで列車で行き、桑畑の中にあつた「大路丘」や「祖之墓」と呼ばれる塚跡、「一本松」から「會長生家」や「宝篋印塔」の各所を巡拝し、これを解脱会の「大祭」と定めたのである。

このころ、聖憲が宗教活動として「御五法」を中心とする「靈修業」によって改めて供養された土地に石神井・三宝寺池(現在の練馬区石神井台)があつた。三宝寺池の側にはこの地域一帯を治める豊島氏の居城「三宝寺城」があつた。豊島氏は、平安時代末から続く桓武平氏の流れを汲む一族である。鎌倉時代半ばの弘安五年(一一八二)、豊島氏は武蔵国豊島郡石神井郷を本拠とした。以来、南北朝時代には、本家(範泰系)と三河守(範泰弟系)とに血脈は分かれたが、それぞれが鎌倉公方足利持氏、関東管領山内上杉憲基に仕え、隆盛した。文明九年(一四七七)、泰経・泰明兄弟は長尾景春に加担して太田道灌と敵対し、平塚城・石神井城を攻撃されて落城、石神井城の城主・泰経と次女の照姫は三宝寺池に入水して豊島一族は滅んだとされる(参照『国史大辞典』)。

ある日、会員を率いて三宝寺池に出かけた英蔵が、そこで信者の桜井つねに靈修業をさせたところ、突然桜井が豊島公の最後の様子などを語り始め、諸々の霊が聖憲に無念のうちに亡くなった豊島公の供養を頼んだのである。聖憲がそれを聞き届け、御札を池に浮かべたところ、吸い込まれるように池の底に沈んだという。その出来事を目の当たりにした随員の会員たちは「霊が喜んでいよ」といふ実感を心得、いよいよ聖憲を崇敬する念を強めたのである。

しかし、物事には必ず表裏ある通り、この年(昭和六年)には聖憲の暗殺未遂事件や、逮捕・拘留といった出来事が次々に起こっている。特に後者は、三十日間の拘留期間の中で宗教活動を停止させることを目的としていたから、聖憲自身は肉体的に大きなダメージを蒙った。しかし、拘留期限ぎりぎりで釈放された聖憲を迎えにきた会員に聖憲は「わしはやめんよ。明日からまたやる」と言い、宗教活動を通じて国民の精神作興を行うことへの不屈の信念を示したのである。

釋尊の母はヤシヨダラ

絵・橋本豊治

④ ラーフラは釈迦の子 母はヤシヨダラ

釈尊は、十六歳の時母親と同じ部族(コリヤ族)出身のヤシヨダラと結婚し、しばらくして男子をもうけた。息子の名はラーフラという、その名は日蝕月蝕などの不吉な現象を指す言葉で、障害になるものを意味する。求道の為には、息子への情愛が障害となるのでこのようにいわれたのかもしれない。妻も息子も釈尊が悟りを開いた後に帰依し、出家した。息子ラーフラはブツダの十大弟子の一人となった。